まちネット通信 vol.66　2024 年 6 月 15 日
発行:まちネットワークよりい
電話 048-582-0174

まちネットワークよりい
まちネット寄居
私たちから発信しよう 私たちのまちづくり
さあ 手をつなご！

まちネット 寄居通信『さあ　手をつなご！』はみなさんの支援力がエネルギー源

5年後、10年後にそなえて

私たちの地域、寄居町を見てみよう

少子高齢化は、加速度的に進行しています。地域での単独世帯数は増加の一途。誰もが自分の老後に不安を抱える時代ともいえます。

寄居町の高齢化率は、55％に迫っています。高齢者世帯、高齢者独居世帯、単独世帯者数とも増加の一途です。町のアンケート調査では（令和2年）将来への不安に対して、不安はないと答えたのは、わずか19.7％。さらに自殺者数は、2017年以降埼玉県平均を上回っています。これらの実態からもう目を離すことはできません。

年をとっても地域で安心して暮らしていくために今できることを探り、皆で知恵を絞りながら今からその手当に取り組んでいきたいと思います。現在ネット会員の皆さんへヒアリングシートのご協力をお願いしています。あまり固く考えずに、井戸端会議、お茶のみ話の感覚で忌憚のないご意見、思いをお寄せください。

ヒアリングシートにご協力を！！

この20年来、私たちが予想もしなかったことが次々と襲ってきています。巨大な災害、異常気象、戦火も絶えず、格差の拡大、環境破壊、福祉政策の後退、物価高など挙げたらきりもなく不安は募るばかりの社会となっています。そんな中、この先 5 年後 10 年後が見えるでしょうか？

声をあげましょう。こんな地域で暮らしたい、こんな助け合いが欲しいと。黙っていては伝わりません。自己完結できる時代ではありません。皆で支え合える地域にしていくためにはどうしたらよいのか。一緒に考え、取り組んでいきましょう。子育て世代の方々の声も拾ってください。子どもたちがのびのびと成長できる環境作り、安心して子育てできる環境つくり、「子育て介護は社会の仕事」ではあっても、身近な助け合いは基本です。

ヒアリング調査後にその結果をもとに話し合いの場を持つ予定です。ぜひご参加ください。

「愛のりタクシー」調べてみた

使ったことありますか？
町内を運行するデマンド型乗り合いタクシー
　どこへ行くにも車がなければ始まらない寄居町。免許返納はまだまだ先の事と思っていたけれど、いやいや、もしかしたら、そうでは無いかもしれないと、うっすら不安になってきた 63 歳の今日この頃。表題の「愛のりタクシー」のこと、ちょっと本気で調べてみた。あらら一細かなルールがあるわー、当たり前ったら当たり前だけど、年取ったら分かるかしら～？（正直言って今でも少し不安）。まだまだ運用ルールも変わっていく可能性もありそうだし、今から時々みておこうかしら。

⦿まずは利用者登録、これは紙でもネットでも出来る。
⦿使えるのは、自宅⇔共通乗降場 【寄居町　愛のりタクシー　共通乗降場　で検索　→少しスクロールすると表示されます】行政施設、交通施設、学校、保育施設、病院、介護、商業、運動施設、観光、金融、その他　計 200 か所以上
⦿利用時間は 8 時乗車から夕方 5 時降車まで
⦿一回（片道）　¥300
⦿3 台が運行中でうち一台は車椅子対応車両。
⦿予約は電話（利用日の一週間前から、当日の
1 時間前まで）。ネット（利用日の 6 日前から前日の午後11:50まで）。

そして気になっていた以下の件について役場に聞いてみたところ、
「広報等でお知らせされているのでご存知の方も多いと思いますが、町外（小川日赤、県立循環器・呼吸器病センター）への実証実験は 9 月に始まり、パブコメや事業者の意見を踏まえての運用開始になる予定です。開始時期は未定ですね。」との事。対応してくれた職員の方から、「皆さんの質問、ご意見があったら是非、寄せてほしい。」とも言われ、行政と町民と事業者で作っていくシステムとして進めていけたらいいなと思いました。　　（ky）

高齢化に想う

　この頃はどこもかしこも高齢化、テレビのコマーシャルも高齢者向けの物が多くなったと、ふと思う。
見たい番組はビデオで CM カットしているので普段は気にしないが健康衛生関連のものが増えていることに若干…まぁ、納得する。

100 歳体操やっています

　半年ほど前から地域で集う体操が始まり参加するようになった。腕や脚に負荷をかけ、ゆっくりと一定の速さで上下左右、単純な動作を行う。日常生活における転倒防止等のリスクが減るらしい。普段あまり使わない筋肉も使い、身体を曲げたり伸ばしたり。一人ではやらない事なので有難く参加している。週に一度、身体のメンテナンスをしている感覚で行うのが良い。地域の人たちと顔を合わせ、話をする機会になるのも好く、地元の事に疎い身としてはこれも有難い。
　如何に健康年齢を長く維持していくかが課題となる社会であるが寄居町の社協（社会福祉協議会）の支援を受け始まった《百歳体操》。何事も話し合い社協に相談し良く整えてくれたリーダーがいる事にも感謝。

　行政の試みをひとつ。将来、買い物難民が増加する

ことを踏まえ、一地区に一か所、希望すれば週一回移動販売車両を誘致できるという。しかし、その場所までの距離も家によっては遠いものとなる（何せ田舎は一地区が広い）。どうすれば利用し易いものになるか話し合い試行錯誤して、行政と折衝出来たら良い。それは移動販売車に限ったことではない。生活しやすい地域の為に、そして頭の老化防止の為に知恵をしぼり。

情けは人の為ならず。それは自分たちが受けうる恩恵だと信じよう。

Y. M.

荒川流域水質調査

荒川流域一斉水質調査を初めて25年以上が経つ。私は定点で3地点を継続してきた。それぞれ観測を続けるテーマがある。

市野川上流、稲荷橋は、私の住む今市地区の下水処理のために、農業集落排水処理施設が寄居町でいち早く作られた。（農水省の助成金での事業で受益者負担はかなりの金額になっている）この浄化施設ができたことで、川の水がどのくらいきれいになっているのか、経過観察をすること。

そして、吉野川赤木橋下。養豚場のし尿が排水されてくる箇所だ。ここは毎年汚濁ナンバー1。養豚場のし尿は、人の暮らす団地三棟分の汚れを出すと言われている。

そして、荒川本流植松橋下。荒川は、下流域の都市や東京都の水道水ともなっている。この荒川本流の観察は大変貴重となっている。水質のみならず、川周辺の水辺の環境は年々人が近寄りがたくなっている。何より、川底の変化は悪化する一方だ。川底の石はぬるぬる状態だ。25年前の川の状況からかなり変わっている。年々水温も上昇している。それでも水質自体は大きな変化はない。渇水期と大雨後ではまた違ってくるが、身近な川の触れ合いがすっかり遠のいてしまった。水辺で遊ぶ「水ガキ」の姿を見ることが無くなったのは寂しい。そんなことを思いながら毎年採水に行っている。もっと身近な川で水と触れ合える環境創りをしたいという思いでスタートした。背景に護岸工事で川辺の自然が失われていたことが大きかった。様々な川の実情と、歴史を学ぶ事も出来た。子どもたちに豊かな水辺を、植物も、水生生物もきちんと残していきたい。

ひとこと言わせて

消えてしまった風景

20 年来続けてきた米作りをやめた。ずいぶん悩んだ末の決断だ。毎年米を作るという当たり前の仕事の流れが無くなり楽になった反面、片腕をもがれたような痛みと無念さと寂しさがある。この地区で唯一の我が家の稲を天日干しする風景が消えてしまったこともやはり悲しい。

それでも町の中間管理機構経由で近所の農家に栽培は引き継いでもらい、荒廃だけは避けられた。
その結果、今年からコメを買うということにならざるを得ない。昨年収穫した分があるので、この秋からとなる。そこでできれば、地場のものをと思い、友人を通して予約することになった。そこで驚いたのはその価格だ。1俵14,500円。申し訳ないような思いだ。農家がJAへ卸すと12,000円(その時の話では)。米農家はこれではとてもやっていけない。日本の食料自給率は低下の一方だが、国の農業政策は、恐ろしいほどの無策。

そんな中で、有機米を学校給食に取り入れている自治体もある。千葉県いすみ市では、1俵 24,000 円、山県市30,000円、京都府亀岡市48,000円で有機米を買い取っている。どこにお金をかけるかで政策の価値がわかる。本当に有機農業を、地域循環農業を守り育てるのか、政策一つで変わっていく。それは未来への投資でもある。我が寄居町でもこうした取り組みは可能だ。ネット通信№56 号に掲載されたこんな記事がある。(バックナンバーは、まちネット寄居の H.P で検索してください)

「地産地消を拡大できる「大口先」は学校だ。学校給食に使われる地場産の食材(キャベツ、玉ねぎ、人参、長ねぎ、大根など)にかぎれば35%前後。

町役場は「地元の大企業」といえる。学校給食は親会社の考え次第で地場産のウエイトも挙げられるはず。他の自治体で地場産「モノ」が盛りだくさんの給食風景がそれを証明している。

大企業ホンダの社員食堂への参入、特産開発、都市生活者の就農呼び込み、寄居町の潜在能力は、地場産業や食の文化を新たに創出する相乗効果の力も持っている。」

まさにこのことの重要性を突きつけられる。
寄居町の大きな強みでもある農業は、地域循環で食糧の自給率アップ、作り手の見える安心安全につながる。気候危機、戦争、紛争などにより食料輸入が危機的な状況になっても、この町に暮らす私たちは生き延

びられる。基幹となる食料、種、肥料、飼料などをどれだけ国内自給していけるか、地域で確保できるか、本気で取り組まないと取り返しがつかなくなるのでは。今日までの国の農業政策は、懸命に農産物を作り続けてきた農家つぶしでしかない。鈴木宜弘氏によるとお米余りと言いながら、米国から1俵あたりおよそ30,000円もの価格で輸入している。(全体では、77万tものコメ輸入)其のコメの行きつく先は、加工と飼料米になっている。かたや国産米の JA 買取価格は、12,000 円この差は何なのだ。愕然とする。

さらに、私たちがあれほどこだわり、攻防を続けてきた遺伝子組み換え、ゲノム食品の表示も消えてしまった。この国のこの社会の行く末はどうなるのか。生産者と消費者、その関連労働者の連携は、今後ますます重要となる。生活クラブ生協のような、協同組合の力の結集が求められる。地域循環経済、社会的連帯経済の広がりが一つの活路につながると信じたい。
田んぼから離れた生産者として、本当に痛感している。

大北秀子

編集後記

3月 9 日の総会から、あっという間に6月になってしまった。総会は、議案書に沿って速やかに行われ書面議決も含めて全員賛成で承認された。今年のテーマは、私たちの手で作っていく助け合いの仕組み。私の周辺では、本当に独居の人たちが多くなっている。1年1年年老いてもいく。話すのは、健康と、困りごとだらけ。それでもまだ話せる場所があるからいいと思いながらも、歩行が厳しく、車も乗れなくなったら一気に生活の質は落ちていく。
さあ、どうしようと近い将来への不安に駆られてくる。生前整理と思いながらも少しも進まない。あそこもここも片づけなければ。庭も含めて手が回らない。どこかで一気に片付けようと思いながら先送り状態。皆、老いて動けなくなる。誰もが行く道。それがわかっているのだから、今から準備していこうと自分を励ます。 H.O